

令和 8 年度 特色 入 試 問 題

《 文 学 部 》

「学びの設計書」に関連する論述試験

「学びの設計書に関連する論述試験及び提出書類」についてA～Cの3段階評価

(注 意)

1. 問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
2. 問題冊子は表紙のほかに4ページある。
3. 解答冊子は表紙のほかに2ページあり、そのうち「ます目」の部分が解答欄である。なお、別に下書き用紙2ページを配布する。
4. 試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
5. 解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
6. 解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
7. 解答冊子はどのページも切り離してはならない。
8. 問題冊子および下書き用紙は持ち帰ること。解答冊子は持ち帰ってはならない。

問 次の文章を読み、筆者の見解および学びの設計書の内容をふまえ、「複数化した自己どうしの対話」についてのあなたの考えを述べなさい。(800字以内)

昔は「泣ける本」というような惹句を見て、「本を読んで泣くななんて……」と思っていたものだが、最近は小説を読んでもノンフィクションを読んでも、けっこう涙腺が刺激されて困る。歳をとって、感動の閾値^{いきち}が下がったのだろうか。

本を読んで涙腺が刺激されたときの気持ちというのは、なかなか複雑だ。「あ、(感動が)来るぞ来るぞ、涙が出そうぞ」と感じると、一方で、それを止めようとする意識がはたらくのである。誰もが経験することだろうと思いつつ、「ややこしいやつだな」と思われそうで、いままで人に話したことはなかったのだが、つい最近のこと、この自己抑制のメカニズムをうまく説明してくれている文章に、ようやく出会うことができた。

ある音楽作品を前に、気がついたら自分が涙を流していたというとき、私はいつでも二つの矛盾し重複する感情を経験するのだ。自分の反応の純正さと激しさへの(そうよぶのはためらいを感じるのだが)満足感と、その満足感をまさに意識していることがなぜか恥ずかしく思われる気持ちとである*。

イギリスの生んだ世界的テノール歌手イアン・ポストリッジが、シューベルトの《冬の旅》全二十四曲を分析した書籍の一節である**。日本版はわたしが編集を担当した。編集をしていて、「ああ、これこれ、この感覚」と感激したので、思わずゲラに線を引いてしまい、あとで組版担当者から「ここはどう直せばいいですか？」と質問されてしまった。

ここで言われていることは、読書にも当てはまる。つまり感動というのは、ある種の甘美な自己肯定感と、安易にそれに浸ることを許すまじとする自己規制の感覚とのせめぎあいだということである。

そんなに自己規制していたら、せつかくの感動が逃げてしまって、読書や音楽をじゅうぶんに楽しめないのではないかとも思う。その甘美な自己肯定感に浸れるだけ浸り、涙を流せるだけ流せば、人生もっとドラマティックで楽しいものになりそうな気がしないでもない。

この自己抑制の感覚は、ポストリッジも書いているように、一種の恥ずかしさ

の感覚である。ただ、電車の中などで本を読んでいるときだけでなく、自分ひとりのときにもこの感覚ははたらくので、「泣くのを人に見られるのが恥ずかしい」ということではない。あえていえば、読んで感動している自分と、それを外から観察している自分とがいて、後者は前者にたいして「ほら、またそんなところで感動して」とツッコミを入れ、前者は「すみません。つい、涙腺が……精進します！」と恥じ入っている感じか。

本を読み始めて、まだ意識が没入しきっていないときには、このツッコミを入れる自分は現れない。「ふーん、舞台は〇〇市なのか」とか「主人公は神経質なところがあるんだな」などと、いわばテキストを読解するための基礎的な情報を収集し整理している段階を経て、そういった情報を意識しなくても、主人公の意識が手に取るようにわかったり、起こった事件の重要度が身をつまされるように実感できたりする段階に入る——つまり、作品に身体ごと没入し始めると、やっかいなことに、それまで単一だった自分の意識が複数に分化し、このツッコミを入れる自分が現れて活動を始めるのである。変な話かもしれないが、わたしにとっては、感動が深ければ深いほど、このツッコミはさらに旺盛になり、加えて冷静さを増し、根掘り葉掘り、わたしの感動の揚げ足取りを始める。

自分の感動にいちいちツッコミを入れる意識を感じることなく、感動の命ずるままに滂沱の涙を流せたら、さぞ気持ちがいいだろう。しかし一方では、感動にふるえつつも、ツッコミ星人のいけずに耳をかたむけながら、涙をこらえる自分のことを、それほど不幸だとは感じていない。それどころか、この複数の自分どうしの「対話」こそが、読書や音楽の感動そのものではないかとさえ思うのである。「やっかいなことに」と書いたけれども、やっかいどころか、ツッコミ星人が顔を見せ始めると、「お、来たきた」とほくそ笑んでしまう。なぜなら、彼が現れたということは、自分がその作品に少しずつ没入しつつあるということであり、彼がツッコミを入れざるをえないほど、自分が感じ始めている感動は深いかもしれないことを表しているからである。

自己の複数化の感覚こそが、読書や音楽の感動の源泉だとするならば、その感覚はいったいどこから来るのか。

考えてみれば、本や音楽作品は、わたしのためだけに存在しているわけではない。たいていの場合は、出版社が大量に複製したうちの一冊であり、不特定多数に向けて演奏される一曲である。これからおいおい問題にしていきたいテーマ

とからめて言えば、「公 *public* の財産とする」という意味で *publish* されたものである。

そのようなものとしての本や音楽を読んだり聴いたりするとき、わたしたちは、「公の一員」である自己と「ただひとりしか存在しない個人」としての自己とに分裂する。個人である自己がいくら感動しようとも、あるいはいくらその作品を勝手な基準で貶そうとも、何の問題も生じないだろう。

じっさい、本を読んだり音楽を聴いている最中に、そういう「個人の暴走」はよく起こる。ある一行を読み飛ばしたがために、「この作家は伏線を敷くのを怠った」と怒りかけたり、先行作品を聴いたことがないために、ある曲にもちいられたアイデアを「画期的だ!」と称賛しそうになったり。そこにツッコミを入れてくるのが、「公の一員」としての自己である。「三ページほど前に戻って読み返してみなさいよ」「待った待った、感激して SNS に投稿する前にいちどググって見たら?」などと、暴走しかけた個人としての自己を諷め、ブレーキをかける。

しかしそれでも懲りない〈個=自己〉は、感動を始めると、「ここで涙腺決壊させてもいいですか」と〈公=自己〉にうかがいを立てる。「うーん、ここはよくあるプロットだよ。もう少し待ってみたら?」「いまピアニストが苦しそうな表情したろ、まさかあれに刺激されたの?」などと、どんどん堤防を高くして行く。

この〈公=自己〉がつねにチェックしてくるのは、じつは、その作品が外の世界と結んでいる関係性を、〈個=自己〉が正しく認識しているか、ということである。それは、その作品の文学史や音楽史の中での位置付け、先行する作品からの影響、著者や演奏家の個性や能力といったものへの依存度といったことである。念のために付け加えれば、ここで要求されているのは、たんにそれら情報を知識として身につけているかではない。知識があればもちろん判断の助けにはなるが、知識のあるなしにかかわらず、作品そのものからそうした外部との関係を感じ得るかどうか、という能力を、〈公=自己〉はまさに問うてくるのである。

そうした関係性を正しく認識し、自分がまさに作品の本質から送り出されたメッセージを受け取っているがために、その感動が惹き起こされていると〈個=自己〉は判断し、ある時点で涙腺を決壊させるにいたる。このときの感覚がボストリッジのいう「自分の反応の純正さと激しさへの……満足感と、その満足感をまさに意識していることがなぜか恥ずかしく思われる気持ち」なのだろう。

ここまでわたしは、複数化した自己どうしの対話を、教師と生徒の対話のように描いてきたが、それは故のないことではない。まこと、読書や音楽の体験とは、自らが教師役と生徒役を演じ分けながらおこなうセルフ・エデュケーションだからである。

読書や音楽鑑賞の対象となる作品は「公のもの」、すなわち publish されたものだと言ったが、その作品に対峙するとき、わたしたちの内部から「公としての自己」が立ち上がる。これを「自己を publish すること」と言い換えてもいいだろう。いままで自分の中にひっそりと隠れていた「自己」——笑いたいときに笑い、泣きたいときに泣いていた無邪気な自己を、外の世界、公の世界にしっかりと確立し存在させること。そのためになされるのが、作品と対峙しつつ、自己の内面でおこなわれるこの対話なのである。

本や音楽の鑑賞とは、孤独で密やかないとなみではけっしてない。人に見えないところでひそかにおこなわれているはずのそれが、じつはダイナミックな対話型教育の舞台となり、人間を公の存在へと高める契機となっているということを、感動の涙と対になって現れる「恥ずかしさ」は教えてくれているのである。

*イアン・ボストリッジ著／岡本時子・岡本順治訳『シューベルトの「冬の旅」』〔アルテスパブリッシング、2017年〕87-88頁。

**分析といっても、和声や旋律や詩の韻律などに着目して掘り下げるだけでなく、たとえばシューベルトの時代の冬はどれくらい寒かったのか、登場するカラスはどんな種類かなど、思いもよらない切り口によるもので、《冬の旅》の相貌を一新する書とあっていい。

(木村元『音楽が本になるとき』(木立の文庫、2020年)より。一部改変)